

三種の即色義説

晴 山 俊 英

ここで扱う即色義説とは、周知のように僧肇『不真空論』に見える、いわゆる三家異説のひとつである。これを考察する際に見るべき資料としては、慧達『肇論疏』（以下『慧達疏』）・元康『肇論疏』（以下『元康疏』）・吉蔵『中論疏』等が挙げられるが、従来の研究はあくまで僧肇を中心に据えたものが主であり、そのこともあってか幾分『中論疏』の説は無視されがちであった。そこで今回は吉蔵の主張を改めて検討し、即色義説についても一度考察し直してみることにする。

まず『不真空論』自体を見ると、

即色者。明色不自色。故雖色而非色也。夫言色者。但当色即色。

豈待色色而後為色哉。此直語色不自色。未領色之非色也。

（大正藏四五・一五二上）

とある。つまりここである即色義説とは、物質がそれ自体単独で物質となるわけではないので、物質とはいっても物質そのものではないとする説である。これに対して僧肇は、物質という以上、それはそれ自体で独立した存在でなければなら

ず、物質を物質として成立させるものを待って物質が存在するということとは、矛盾を生じてしまうことになる、と論じて斥けている。ここで、純粹な紹介文としては「即色者。明色不自色。故雖色而非色也」が考えられる。元康は次の「夫言色者。但当色即色。豈待色色而後為色哉」も紹介文と見ているが、このことは既に横超慧日氏も指摘しておられるように、元康の誤解であろう。ともかく純粹な紹介文だけを見ると、とき、一体この説のどこが間違っているのか理解に苦しむことは否めず、そのことは逆に各人の捉え方によってはこの説の意味合いが大きく変わってくる可能性を示唆しているであろう。

初めに『慧達疏』を見ると、

第二解即色者。支道林法師即色論云。吾以為即色是空。非色滅空。此斯言至矣。何者。夫色之性色。雖色而空。如知不自知。雖知恒寂也。彼明一切諸法。無有自性。所以故空。不無空此不自之色。可以為有。只已色不自所以故空為真耳。

（正統藏一五〇・四二九左上）

とある。ここでは、物質はそれ自体単独で物質となるわけではないから、物質とはいってもそれは空としての存在であることを述べている。そのうえで知るといふ行為には必ず対象があり、単独で知ることがあるわけではないから、知とはいってもそれは寂漠としたものである、といっている。慧達はこの説の主張者として支道林を挙げてはいるが、その根拠を示していないばかりでなく、この説への反論も甚だ消極的であるといわねばならない。そこでこの支道林の説を正當視できる可能性を考えなければならぬ。即ち『中論疏』は同じ支道林をもつて正説と見なしており、

次支道林著即色遊玄論。明即色是空。故言即色遊玄論。此猶是不壞仮名。而説実相。与安法師本性空故無異也。

（大正藏四二・二九上）

といっている。ここに『即色遊玄論』なる書が見えるが、この書を支道林が著したことについては、『梁高僧伝』巻第四（大正藏五〇・三四八中・三四九下）及び『陸澄目録』（大正藏五五・八三上）によっても確認されるため、ほぼ確実であると考えてよいと思われる。ともかく吉蔵のように正説であるとするならば、僧肇を邪説者としないう限り、『不真空論』のいう即色義説とは支道林のそれではないことになるから、別の即色義説を考えなくてはならない。そこで吉蔵は関内の即色

義説をそれに当てている。

第二即色義。但即色有二家。一者関内即色義。明即色是空者。此明色無自性。故言即色是空。不言即色是本性空也。此義為肇公所呵。肇公云。此乃悟色而不自色。未領色非色也。

（大正藏四二・二九上）

従来からいわれているように、確かにこの説明文だけでは、先の支道林の即色義説とどこが異なるのか明らかではない。しかし、吉蔵は、実はこの関内即色義説は周顒『三宗論』のいう不空仮名説と同じであるといっている。

不空仮名者。經云色空者。此是空無性故言空耳。不空於彼色也。以空無性実故名為空。即真諦。不空於仮故名世諦。晚人名此為鼠糞義。難云。論云。諸法後異故。知皆是無性。無性法亦無。一切法空故。即性無性一切皆空。豈但空性。而不空仮。此与前即色義不異也。

（大正藏四五・二九中）

つまり無自性ということだけを空と考え、物質そのものとは有として残っているとするのが不空仮名説であると思われる。これを参照することにより、関内即色義説への「不言即色是本性空也」という批判が大きな意味を持つてくる。ここでいう鼠糞の義とは、『一諦義』（大正藏四五・八四上）によれば、鼠が栗の中身を食い尽くして中身は空洞であるが、皮が残っていることに喩えられているのである。つまり物質が無自性である点を空とはするが、外見としては有であるというのである。吉蔵にいわせるとこの鼠糞の義こそが僧肇に破

折された即色義説ということになる。

一方、即色義説に關して從來最も高く評価されてきたのは、『元康疏』である。

第二「破」晋朝支道林即色遊玄義也。今尋林法師即色論。無有此語。然林法師集。別有妙觀章。云夫色之性也。不自有色。色不自色。雖色而空。今之所引。正此引文也。——中略——若当色自是色。可名有色。若待綠色成果色者。是則色非定色也。亦可云若待細色成麁色。是則色非定色也。（大正藏四五・一七一下）

ここでは『即色遊玄論』ではなく、『妙觀章』が典拠であるとしている。ではその『妙觀章』とはいえば、『世説新語』『文学篇』の注に、

支道林集妙觀章云。夫色之性也。不自有色。色不自有。雖色而空。故曰色即為空。色復異空。

とある。ここで元康は、「色即為空。色復異空」を削除している。逆をいえば『不真空論』を解釈する上でこの語が邪魔であったのではあるまいか。つまり元康は即色義説を縁と果、あるいは細と麁に分けて説明しており、「色」という語が単独で用いられる文脈はあまり好ましくはないのである。

ここで整理すると、三種の即色義説とは、一つには正説としての即色義説、二つにはいわゆる鼠楼栗の義としての即色義説、三つには縁と果・細と麁という關係を示す即色義説である。しかし元康のいう即色義説には吉蔵のいう縁会義説と

一致してしまおうという落とし穴がある。『中論疏』には、

第七于道還明縁会故有名為世諦。縁散故即無称第一義諦。難云。經不壞仮名而説実相。豈待推散方是真無。推散方無蓋是俗中之事無耳。

（大正藏四二・二九中）

とあり、種々の原因や条件が整つてものが存在に至ることを世諦とし、原因や条件が揃わなければ存在しえないことを第一義諦としている（更に後段では案瓜の義として説明される）。従つて元康が縁会義説をどう捉えていたのかははっきりしない限り、我々も簡単には是非判断を下すわけにはいかない。あるいは引用文に操作を施した元康よりも吉蔵の説の方に説得性が出てくるであらう。

してみると、吉蔵は即色義説者として支道林を想起したのではあるが、彼の説を検討していくうちにそれが正説であることに気付いた。しかし僧肇の見解を誤りとするわけにはいかなかったので、僧肇が接触したと考えられる（つまり関内に流行していたと想像される）即色義説は、全く支道林のそれとは次元の異なるものであったと考え、『中論疏』で提示するに至った、とすることに大きな無理はなからう。

僧肇のいう即色義説と歴史的事実としての即色義説、そして吉蔵の見識をもう一度検討する必要があると考える。

△キーワード▽ 即色義、吉蔵、『中論疏』

（駒沢大学大学院）